

ば駄目なんだ。慶応も東大も明治も法政も立教も勝たねばならないのだ。そうすれば六大学の野球も発展するのだ。」との事を話して笑って居た。

また、ある時「君、青森の中学か弘前の中学か。それともその他の中学校かね。」と云うので、「私は神戸の瀧川中学校です。」と云ったら、甲子園での野球の話になって「おれは八戸中学なので八戸を勝たせたいが、青森県の野球は、青森中学も青森師範も、弘前中学や東奥義塾も、また五所川原の農学校も木造中学も勝たねばよくならないんだ。」との事でした。毎晩の様に酒保に行き先輩に御馳走になるので、先輩の御名前は？、と聞いてもただ笑ってばかりでした。

一二月に私は弘前の師団司令部の経理部に分遣になり、その人は十一月の末で召集解除になり、家に帰る事になっていました。

最後の夜「先輩、今日は私が払いますからゆっくり飲みましょう!!。」と云うと「お前は幹部候補生、五円五拾銭しかもってない。おれは下士官でお前より多く貰っているんだ、お前はそんな心配をしなくてもよい。それだけ金があるなら親に手紙を出してやれよ!!」との事でした。

そして最後に、先輩のおまえは？と聞いたら「おれは、八戸の天下常吉と云うだ。今後八戸へ来る機会があったらたずねて来いよ。」と云って別れました。

天下常吉氏は、早稲田の野球の監督をやったり、青森県の野球のためにつくされた方でした。その後会いたいと思っただけですが、会う機会もなく現在に至っています。これがひげづらの天下常吉先輩との出会いです。

七、東京・早稲田時代 (3)

〓今 孝君、西澤清美君 〓

早稲田大学専門部商科に入学し二ヵ月を経過した六月のある日、早稲田の正門前の稲門堂でクラス会を開催した。

その時各自が立って自己紹介をしたのだが、背の高い色の白い男が立って「私は青森商業で、出身地は青森県の中里で今、孝と云います。」と云って座ると、次に立ったのが「私は青森中学校です。出身地は青森県の小泊ですが、現在は青森県の金木に移って住んでいる西澤清美と言います。」と云って座った。そしてその後何人か立って自己紹介し、私の番になり「私は、神戸の滝川中学校ですが、生まれは青森県の弘前です。しかし父の仕事の関係で現在神戸にすんでいます。」と云うと、今君と西澤君が私の傍に来て話をし、それから親しい交際がはじまりました。

西澤君は金木の西澤旅館の一族で、卒業後は青森銀行に入り、最後は県庁内の青森銀行支店長で退職し、現在は青森市に居住して居ます。

学校時代には授業が休講になると今君の鶴巻町の下宿に行き休息したものです。卓球の試合があればよくY・W・C・Aに応援にいったりしたものです。

昭和十三年三月早大専商を卒業、今君は大学商学部に入學、卓球を続けることになり、私は笹戸船渠株式会社に入社し、五月に山口県笠戸島の造船工場に勤務。十四年四月に召集となり、五月一日青森歩兵第五連隊へ入隊のため退職。神戸の家に立ち寄り東京に出て、最後の見納めと母校の大隅講堂の前に居たら学部に残った今孝君に会った。

「岩田ッ。どうして来たの。」召集で青森に行くので母校に別れを告げる。一八九三年（明治二六年）京都に行き各種展覧会に出品して入選、一八九五年日本美術協会展一等賞の連峰紅葉が宮内省買い上げとなり画名あがる。

一九四〇年（明治三七年）中国に渡り各地を遊歴中、一九〇七年（明治四年）に文展審査員に任命されたが固辞、生涯反展主義者を貫いた。一九一八年（大正七年）大阪で「千馬会」を催し、馬の千姿百態を短時間で描き分けた。翌年欧米各地を巡歴、卓越した水墨画の力量の上に新しい西洋風な画境をひらいた。一九三〇年（昭和十二年）東京に転住、一九三七年（昭和十二年）郷里の知人らと料亭で揮毫中倒れた。

▽井沼清七（いぬませいしち） 〓一九〇七～一九七三年（明治四〇～昭和四八年）。

北郡中里町に生まれ、弘前中学、早稲田大学を卒業、陸上競技の名スプリンターとして活躍。特に一〇〇m一〇秒六の記録は、最高記録として現在も破られていない。一九二八年（昭和三年）第九回オリンピック・アムステルダム大会に、県人最初の参加者として、四〇〇mリレーに出場。また一九三〇年の第九回極東選手権大会など、多くの国際大会に日本選手代表として参加した。松坂屋に勤務し、後に松栄食品株式会社社長となる。日本陸上競技連盟審議員、東京陸協副会長など歴任。

▽珍田捨己（ちんだすてみ） 〓一八五六～一九二九年（安政三～昭和四年）。

弘前藩士珍田有学の長男として生まれ、はじめ辰太郎といった。藩学を経て東奥義塾に学び、一八七五年（明治八年）ジョン・イングから洗

に来たよ。」と云うと、「二三日俺の下宿に泊まって行けよ。」青森は初めてなので親類に泊って一日に入隊するので、今晚の汽車にするよ。」と云うと彼は卓球の練習を早く終り、上野の駅まで送ってくれた。夕食を共にし、明日の朝食べろよ、と言って弁当を買ってきてくれ、八時頃の汽車を見送ってくれた。

召集解除（十五年十一月）になり、上野駅で降り、母校に行き大隅講堂の前に居たら、偶然今孝君に会った。

「どうして来たの?」「召集解除になったよ。」と云うと「山口県に行くのか。」「家が東京に移り、市川の化学療法研究所に勤めることになったよ。」それはよかったね。」との事。

それから彼が早稲田を卒業し、日立製作所亀有工場に勤務。結婚して大坂に行くまで彼の下宿に行ったり、早稲田で会ったりの交際が始まった。

大坂に行って山本と性がかわり、女の子が生れたとの知らせを受けたが、戦争が激しくなり音信が途絶えてしまった。

私は東京で空襲に会い、車力でも火災で焼け出されたので、今手許にあるのは、今君が全日本卓球大会で優勝の時のもので、青森商業時代の卓球の仲間の小中氏、石井氏、三上、宮川氏外が寄って居ります。山中覚郎氏も嘉瀬だったと思いますこれが今孝君を思い出した一枚の写真となりました。

▽野沢如洋（のざわじよよう） 〓一八六五～一九三七年（慶応元年～昭和十二年）。

日本画家、弘前袋町に生れ、十二歳で三上仙年に南画の手ほどきを受

礼を受けた翌年の明治天皇東北ご巡幸の際には「ハンニベル士卒を励ますの辞」と題する英語による御前演説をした。一八七七年、イングの世話で渡米し、イングの母校であるインジアナ州アズベリー大学に留学。一八八一年に帰国し、母校東奥義塾の教授をするかたわら牧師をしていたが、一八八五年（明治一八年）外務省に入り、各地領事やオランダ公使、ロシア公使などを歴任した。一九〇三年（明治三六年）小村寿太郎外務大臣のもとで外務次官となり、日英同盟、日露交渉、日米紳士協定に参画したほか日露戦争後の講和条約締結のおぜん立を整え、一九〇七年その功績で男爵を授けられた。翌年ドイツ大使、ついでアメリカ大使、イギリス大使を勤め。条約改正の功で一九一一年子爵に叙せられた。第一次大戦後の一九一八年（大正七年）パリ講和会議の全権委員として日独戦争の結末をつけ、その功で一九三〇年伯爵となる。同年退官して宮内省に転じ、東宮殿下（昭和天皇）御外遊の供奉長、東宮大夫、皇后宮大夫を経て侍従長となり、枢密顧問官に任ぜられた。◇青森県百辞典より◇

▽賀川豊彦（かがわとよひこ）一八八八〜一九六〇年（明治二一〜昭和三四年）。

キリスト教伝導者、社会事業家。神戸市生まれ、徳島中学時代にキリスト教に入信し、明治学院神学部・神戸神学校からプリンストン大学（アメリカ）に進学した。第一次大戦末期に帰国し、もっともしいたげられた人々に伝導する意図で神戸市葦合区新川の貧民街にはいり、のち労働運動・協同組合運動・農民運動・平和運動などに広く活躍し、キリスト教人道主義を実践した。著書は「死線を越えて」など。世界原色百

▽今 孝（こんたかし）一八九一〜一九四六年（大正六〜昭和二一年）。

卓球界を風靡した不世出の英雄。北津軽郡中里町に生れ、父豊三郎・母りなの八男。母りなは嘉瀬出身（山中兵一郎・山中要吉の姉）である。中里小学校を卒業後、青森商業に進み卓球部に籍を置き、昭和八年一月の東郷旗争奪全国学校対抗戦の決勝戦で青森中学の宮川選手と六時間に及ぶ戦いを演じ、華々しくデビューした。同年全日本ランキング第十五位。昭和一〇年一月東郷旗争奪全国学校対抗戦全勝優勝、全日本卓球選手権大会優勝、日中対抗戦中学生日本代表、八月全国都市対抗卓球大会（青森代表）優勝する早稲田大学に入学、昭和一一年全関東学生選手権大会優勝、全日本卓球選手権大会優勝。昭和一一年から一五年までは前人未踏の全関東学生・全日本卓球選手権五連覇という偉業を達成。この間昭和一三〜一四年には全日本選手権においても単複優勝の栄冠を収めた。

昭和一六年早大商学部を卒業後日立製作所本社に入社、兵役につき昭和一九年に復職、昭和二〇年日本卓球界の元老山本称一郎氏の長女智子嬢と結婚、間もなく病に倒れ病床の身となった。日本卓球を世界一にのし上げることを念願に、自らも寝食を忘れて尽くしたが、戦後の激動に耐えかねて昭和二二年一月一日永遠の眠りについた。◇中里町教委の資料により◇



写真は今 孝氏



衣文化・津軽裂織を織る

木村治利

津軽の冬の暮らしは、雪と寒さに耐える暮らしであった。東北は綿花栽培のできぬ土地だけに雪国の衣生活は厳しかった。

人々は麻を育て、布を織りそれを仕立てて衣服とした。江戸中期大阪地方から入ってきた暖かい木綿や古手木綿へのあこがれはすまじいものであったろう。

ボロを裂織し、古着を新しい着物に代える裂織は、貧しさの表徴ではない。厳寒に抗して生きた農漁民の知恵と誇りが新しい衣文化の創造だったのだ。

金木町芦野 葛西やえ子さんらは、十年程前から仲間十人と農作業のかたわら裂織をつづけている。

豊かな生活と共に忘れられ、消えかけた津軽の女達の手仕事を今に伝えて織りつづけてゆきたいと次のように話してくれました。

その昔、上方文化が隆盛をきわめていた頃北前船で運び込まれた木綿布は、麻布や樹皮布しか知る術がなかった人達にとって、貴重なものとした。

その木綿布がすれ切れ果てる一瞬、津軽の女達は、古木綿布をいとおしみ組状にひき裂き、緯糸にして再び命を与えました。

津軽の気候風土と生活の中から生まれたこの織物は、豊かな生活と共に何度となく消えながら、素朴で美しいぬくもりと共に復興しました。今、私は夢色を追い求め、芽ぶきと同時に山野を走る。そして語りかける。

どうしてすばらしい色に生まれかわるのかと。想像を絶する寒さと、貧しさが生み出した津軽の裂織の手のぬくもりを伝える事が出来るなら幸せと思います。

裂織は、細く裂いた布（七耗一糧）を横に打ちこんで織った織物で（ぼろ織）などともいわれ、帯や労働着用に地方の家庭織物として古くから用いられている。

一種の廃物利用であるが、いろいろの布を織りこんでいくうちに、巧まぬ色の交錯があらわれて、帯地などとしては特殊な効果をみせることがある。横に打ちこむ織物は、これによりをかける場合とよらずにそのまま織りこんでしまう場合とあるが、裂織として古く行われたものには、よりをかけたものが多いようである。

縦糸には、たいていもめん糸を用いるが、横にも、もめん糸と布糸と

を交互に打ちこんだものもある。分厚い丈夫な織物であるから用途は帯や労働着のほか、敷物などにも多く向けられる。

尚裂織については、天明八年六月（一七八八年）から翌年寛政元年三月に執筆された比良野貞彦著「奥民図彙」の中に漁民服として記録されている（別記）

織機には、「地機」「高機」がある。

葛西さんらの織機は「地機」で台は船底となっている。一四〇センチ、巾七〇センチ、高さ二五センチと低い。織機では、巾一〇センチ、長さ四メートルの带状に織ると制作日数は、四、五日かかる準備作業に時間がかかるのだ。古布を洗って、裂いて、糸をかけて作業が開始されるのだ。

又、裂織には自然の草木染めが欠くべからざるものである。

グレーの染色には、栗、柏、月見草
黄色の染色には、イタヤカヘデ等が使用されている。

昔の布をそのまま利用し、ただ単純に織り込む作業なのに、素朴の中にも自然彩色の美しさ、温かさが、じんと胸に透み込んでくる春の工房である。これぞ津軽の衣文化であろう。

「奥民図彙」

漁者服

宇鉄（ウテツ）、三馬屋

（ミムマヤ）アタリノ猟師、

カクノコトキモノヲ着スルモ



漁者服

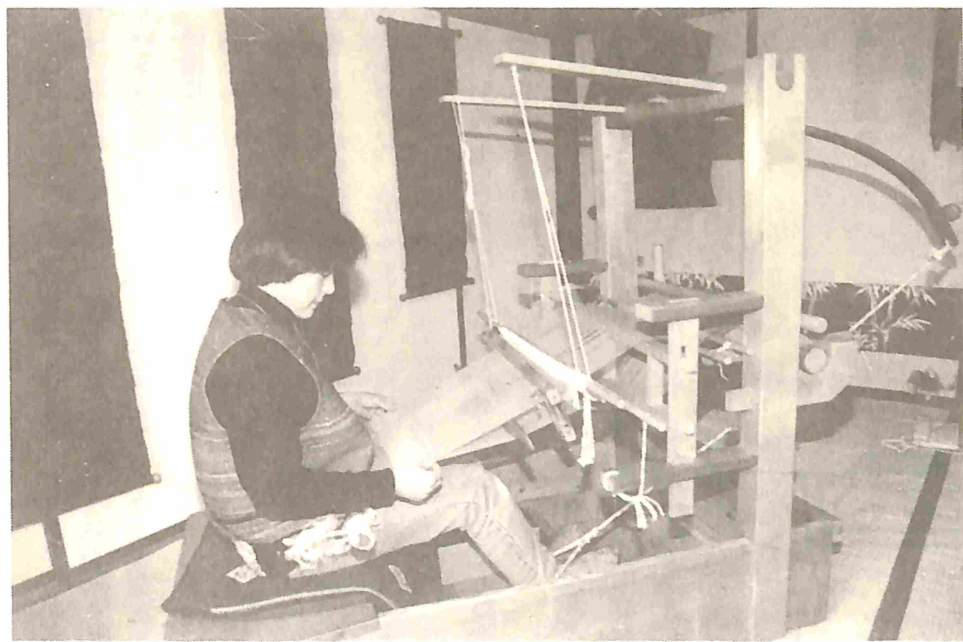
ノアリ。コレハ松前ニテ、漁人ノ着スルモノ、ヨシ。基地ハアツン（シ）ト云木ノ皮ニテ、織タルモノナリ。又サキヤリト云モアリ、サキヤリハ、麻ヲホソクサキテヨリタルナリ。
モヨウハ紺ニ染タル布ヲ、幅五六分ニタチテヌイフセタルモノナリ。

漁者服

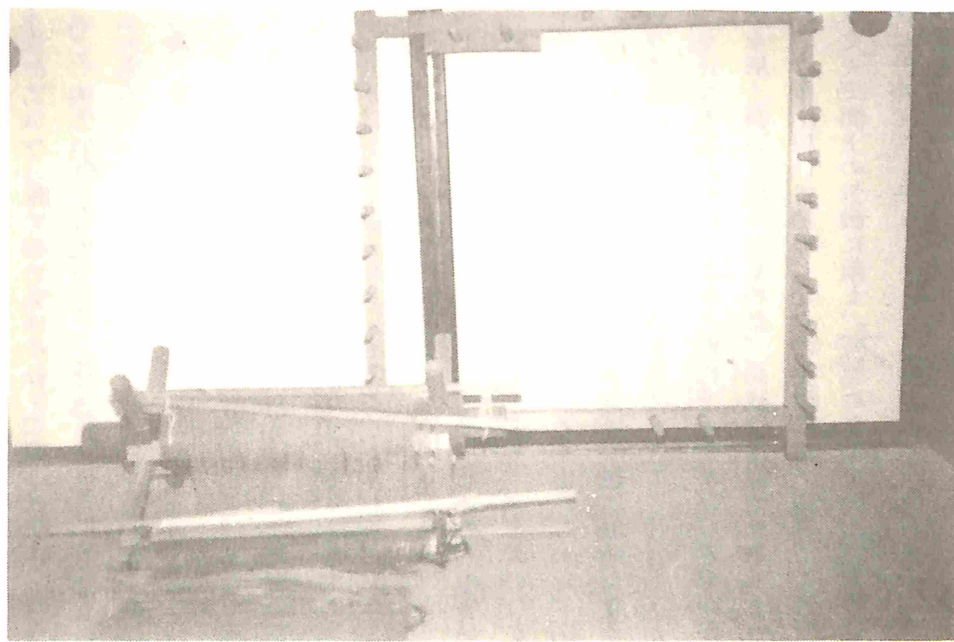
宇鉄（三厩村宇鉄）や三馬屋（三厩のこと）あたりの漁師で、図の様な模様のある着物を着るものがある。これは北海道松前の漁師達が着ているものと同じものだそうである。図の説明には「基地ハアツン（シ）ト云木ノ皮ニテ織タルモノナリ」とある。

そこで思い出すのは、厚司（アツシ）というアイヌの織物である。「オヒョウ」「シナノキ」「アカダモ」などの木の皮からとった繊維で織る地厚の織物だ。ひじょうに丈夫で、アイヌのほか北海道の漁夫や仲仕たちの労働者や前垂れなどに多く用いられた。図の模様も、厚司のそれとよく似ている。この模様は、紺に染めた布を幅五〜六分に切って縫いつけたものだという。

またこの地方には、これと別にサキヤリというものがある。これは麻を細く裂いて織ったものだ。裂織は津軽でサグリといい、麻糸を経に、古布を裂いて細くしたものを緯にして織る。これで作った作業衣は丈夫で海上の労働に敵し、防寒にも役立った。津軽はもとより、全国に分布している。



津軽裂織を織る葛西やえ子さん



織機の一部

七面大天女（七面様）

秋元惣之進

嘉瀬観音山の忠魂碑北西の眺望台の隣りに高さ一丈位の朱塗りの鳥居が立っており鳥居の北側に「七面大天女」の石碑が建立されている。往時には観音山の東向いの「オモデ流れ山（鎌田君吉 所有山地）」に建立されておった。

七面大天女の石碑の台座を見ると次の氏名が刻まれて居る。

代表 浜田妙意 （青森市 本部）

（他町村の氏名は省略する）

青森市 五名
北郡 長橋村神山 九名

金木町 一名

嘉瀬 村の氏名

浜田永作（霊能者ⅡゴミンⅡ通称インパ神様）

鎌田君吉 白川征五郎 原田耕造

笹森作太郎

嘉瀬は五名の内 四名は物故者で、現在、元気で生存し、石碑に刻まれて居る白川征五郎さん（昭和町Ⅱ七九才）に七面大天女の石碑建立の由来やら其の他について嘉瀬老人福祉センター（通称老人クラブ）

に於て聞く事が出来た。

往時には大抵の集落には医者や産婆（助産婦）がおらず、病氣や出産をしても診て貰えず霊能者（ゴミン）に病氣や安産の快復を祈禱して貰った。

特に妊婦は母体に数カ月も胎児を宿り、嫁である妊婦は其れでも労働に耐えなければならず分娩迄は苦痛そのもので有り、分娩日には集落に産婆が不在の為に老婆が世話をし介護したと言う。

或る日、インパカミサマが自宅の神殿で一心不乱に祈願して居ると眼前に不思議にも突然、七面大天女 が出現し「吾れは天から舞ひ降りたお産の神、七面大天女である。世の妊婦や出産（分娩）を苦痛から護り軽減するであろう。吾れを嘉瀬オモデ流れに石碑を建て祀るが良い」と言い、天に上昇姿を消したが、これが安産の神様、俗に言う「七面様」であるがインパカミサマは早急に各集落（市町村）に話しかけると数百戸に近い壇家が集まり、早速、観音山の東向い「オモデ流れ」に石碑を建立し祀った。

往時には安産の神、嘉瀬の七面様と地方民から親しまれ、ごった返りする程の賑やかだったが嘉瀬の村里から、祀ってある石碑迄は余り

にも遠く、又、森林や雑草が繁茂し昼なをウツ蒼とし、碑は繁茂する雑草の中に隠れる程で壇家や信者一般の人々は参拝が困難で次第に薄れて行った。

このような状況から講中の役員は石碑に参拝者が薄れて行くのを懸念し協議の結果、昭和六二年九月吉日「オモデ流れ」より七面大天女（七面様）の石碑を現在の嘉瀬観音山の眺望地に移転、再建立したが今もなお、妊婦や一般の人々の参拝者で線香やローソクの灯りが絶えない。

嘉瀬の小話（その一）

藁乳穂の陰の赤ん坊

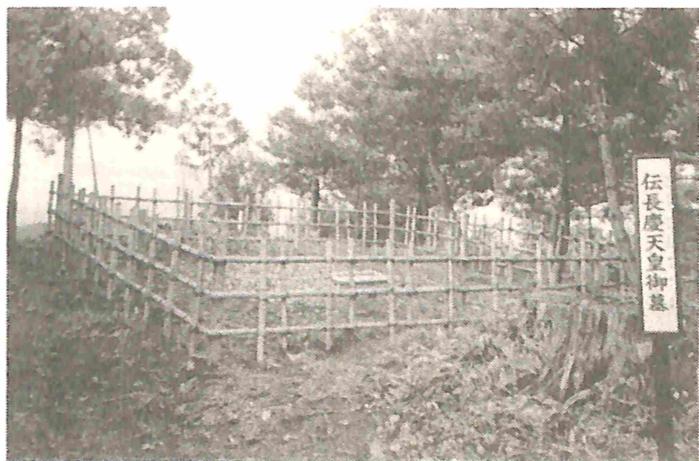
村外れの農道で、金九郎と、幼馴染のサダがぼったり合った。三年前サダは隣村へ嫁に行き背中には赤ん坊をおんぶしていた。金九郎は、サダを道端に幾つも並んである大きな藁乳穂の陰に連れ込んだ。そして、サダを藁乳穂に押しつけるとサダはすぐに応じた。金九郎がサダを抱くようにびったりくっつくとき、金九郎の顔と赤ん坊の顔が真っ正面から鉢合わせになった。金九郎の顔がくっついて離れたりしているうちに、赤ん坊は「見イネ、見イネ、バー」でもやっているとと思ったのか、金九郎の顔が近づくと目をパッチリさせてニタニタ笑うのだった。さすがの金九郎もキマリが悪く、赤ん坊の顔を見ないように目をつむって押していたら、なんと、下の方がキマリ悪そうにガックリした。

「村」

天皇の御陵について（その一）

本県中津軽郡紙漉沢村（現相馬村）には長慶天皇の御陵として伝えられる旧跡あり。かつて取り調べの上その筋へ上申しおることなるが、ここにまた福岡県嘉穂郡碓井村と、千年村と両村の間にも同天皇の御陵伝説地ありて今より数年前同県庁にて取り調べ、その筋よりはいまだ一回の調査もなく、そのままになりおれるよしなるが、史に拠りて案ずるに、本年はあたかも長慶天皇崩御の応永七年より実に五百年に当り、来る三月十七日はその御正忌に相当せるより、嘉穂郡長は県知事に上申して調査を急請せりという。

（65頁へつづく）



伝長慶天皇御墓

雲祥寺聞書

（雲祥二十三世東堂）

一戸哲三

雲祥寺開創については、北の街社刊の吉村和夫「金木屋物語」陸奥新報に連載された花田要一「藩政時代商家の暮らし」、「金木郷土史」等に記載されているのが通説となっている。

南部櫛引（三戸郡館村櫛引）城主武田甚三郎信建が、天正十九年南部信直と九戸政実の南部宗家相統争い（第二次九戸の乱）の折、九戸方に加担して戦に敗れて津軽に逃れ、慶長元年金木山雲祥寺を建立、同行した菩提寺住職繁翁茂和尚を住職とした。とされる。

川倉三柱神社の事

川倉故其田市五郎氏の話。

明治初年に神佛分離の事があって、本尊の観音菩薩を弘前長勝寺に隠匿したが、その後そのまま紛失してしまった。本尊の背中に櫛引氏と彫られあったので何処かにあるかも。と言うのである。

櫛引氏とは、成田甚三郎が櫛引城主であった関係から、通称櫛引氏を名乗ったのである。因に雲祥寺八現存ある成田甚三郎の五輪塔墓石にも櫛引氏と彫ってある。成田家の原図に「……金木山雲祥寺は当家の建立シタル一寺也。其後百姓ト成り川倉観音林ハ地方屋敷跡也」と

ある。

現在の本尊は弥陀、薬師、観音の三体佛で政治家津島文治の祖母津島イシの寄進による。当初の姿と同じと言われているが、三柱と言いつ尊佛と言いつ、三がつくのは何かに由来するのであろうか。

川倉地蔵尊のこと。

恐山と同じく慈覚大師の開山と言われるが其の後衰退していたところ雲祥寺開基繁翁茂和尚によって中興され現在に到ると言う。一説に櫛引（武田）甚三郎が津軽へ落ち着いたのは妻ノ神で、川倉賽の川原のあたりと言われているから、しばらく居住したと推測される。

甚三郎について

雲祥寺開基家は武田甚三郎信建であるが、もう二人の武田甚三郎が居た。

三代大浦城主政信の二男甚三郎守信がその一人である。守信は大浦為信の父にあたる。甚三郎守信は二男のため赤石城武田筑前守の養子となり武田甚三郎を名乗った。この甚三郎守信は第一次九戸の乱で戦

死している。

更に「津軽系図」に守信君三子あり、長女は兼平綱則之妻、一男扇為信、二男甚三郎信勝、とある。

いづれにせよ南部武田氏にとって甚三郎と言う名は何か由緒ある名であるかもしれぬ。

武田源左衛門の事

金木新田、武田新田を開拓し、旧武田村開村の基を礎いた武田源左衛門は大正四年に特旨をもって縦四位を贈られているが、源左衛門は雲祥寺開基家武田甚三郎の弟で、共に津軽へ落着いた後、為信に仕官した櫛引孫次郎の五代目源左衛門定清のことである。これまた寺と無縁ではない。

寺紋のこと。

大正の末期か昭和初年の頃と思う。母に寺の紋についてたづねた事があった。

「本堂の机にしている紋、木瓜」

それが答であったが、十年程たってそれが間違いとわかった。山門についている武田菱武田の紋が正解であった。木瓜の紋は武田甚三郎の家老大橋家の家紋で、櫛引家没落の後、寺の維持に努めたしるしであった。現在一戸家の紋は剣花菱でこれまた武田ゆかりの家紋である。
(此の稿は多く金木屋物語による)

貧農と周旋屋

秋元惣之進

一月のふるさとを探る会の例会で「五十年前の世相をそれぞれ会員がかりべに記録することを申し合わせたので、次に私の調査したものをつたない文章にしてみた。

嘉瀬六百年余町歩の水田を有するが当時は多少の降雨でも岩木川の逆水で原始的な(昭和初期迄)旧十川、飯詰川、小田川の堤防が決壊、水田は冠水し風水害、旱魃と天候異変の度事に甚大な被害を蒙らうむった。収穫時には季節外れの霜が降り田圃が赤くなる程に稲穂が脱粒し、ツマゴリ=藁靴を履いて稲刈りをした年もあった。

秋には一年の結晶である刈り取った稲が、ごっそり冠水の為に流失したり泥に埋没する事も多々あった。

この称な事が三年に一〜二回は必ず有り嘉瀬地区の水田の三分の二は皆無作の災害地帯であった。

資料に依ると大正から昭和初期迄の。

大凶作大正二年(大凶作) 大正五年(四部作)

大正十年(凶作) 大正十一年(五分作)

大正十三年(凶作) 昭和六年(大凶作)

昭和七年(大水害) 昭和九年(冷大水害)

青森県津軽農民の関連年表

西暦	和暦	
1924	大正13	9 - 車力村小作組合結成、津軽地方農民運動の引き金になる。
1929	昭和 4	2 - 23車力村小作争議激化、幹部逮捕され警官と乱闘、小作側勝利
1931	昭和 6	1 - 10津軽一帯未曾有の大吹雪、1 - 20「嘉瀬の桃」こと、黒川桃太郎青森で死去 7 - 5津軽鉄道全通、この年冷害凶作で娘の身売り急増
1932	昭和 7	この年1月〜3月迄で県下の娘の身売り1,500人、8〜2〜5県下大豪雨
1933	昭和 8	10〜11岩木川改修工事で着工以来の犠牲者206人となる10〜20深浦地方に大豪雨
1934	昭和 9	3〜21県下暴風雨。12〜8教員の俸給支払い凶作の影響で遅滞続出、この年東北地方大凶作。秋から冬にかけて欠食児童や娘の身売りが続出行き倒れや自殺者増大。
1936	昭和11	この年県下の小作争議267件で、これまでの最高。米は連年赤字生産が続いていたが、この年からようやく黒字生産となる。
1939	昭和14	4 - 5農林1号の作付ふえる、昨年の収穫高1位、4石9斗6升の農村では「農林1号は農家から貧乏を追い払った」といっている。この年、実収高162万6千8百81石で、本県産米高の新記録達成、各町村で農業報国挺身隊結成
1940	昭和15	2 - 金木修練農場に満州開拓地の花嫁養成目的で女子訓練所開設 4 - 11嘉瀬村に「桃地蔵」建立。津軽民謡中興の恩人偲ぶ。 11 - 3全国青年相撲大会で金木町青年団連続優勝。

昭和十年(冷大水害)と記録にある。

この間に小作人の下層の水田は三年に一〜二度は必ず冠水で皆無作同然の年があった。この様な悲惨な状態で喰うや喰わずの貧農の小作人は打続く大凶作に、大作人を通じ大地主に年貢米の軽減を依頼、嘆願すると、大地主は水田の返還を迫って田地を取り上げ、別な新しい小作人に水田を貸付けて新しい小作人から一年分の小作料金額を前納させて、秋の収穫時には、また新しく年貢米を納めさせた。

地主から田地を取り上げられた貧農の小作人は明日の糧にも事欠き途方に暮れ、喰うや喰わずで其の日を凌いだが大地主は生血を吸うように過酷な年貢米を貧農の小作人から搾り取った。当時の反収は大豊作でも四〜五俵だった。(当時は化学肥料が無かった。)

反収四〜五俵の内から年貢米を搾り取られた貧農の小作人は草根木皮の貧乏生活にたえて来たが、地主は貧農の小作人は主には総て受身で地主の搾取と圧力に抵抗する事なく、空気を意識しない動植物の様に長い間の宿命と思いい、地主の権力と圧迫に耐えるのみであった。

貧農の百姓だから仕方が無いと諦めて食われなくなると娘や息子を売った。